

○専修寺と御影堂・如来堂について

1 専修寺の概要

専修寺は、津市一身田町に所在する真宗高田派の本山寺院です。栃木県真岡市（もおかし）高田で、草創され、15世紀後期に現在地に移り境内を構えたと言われていました。度重なる火災で堂宇が焼失しましたが、万治元年（1658）に津藩主藤堂家から土地の寄進を受け、御影堂から順次、諸堂が整えられてきました。広大な境内には、今回指定を受けた御影堂、如来堂の両堂のほか、宗祖親鸞を含む歴代上人の廟所や拝堂からなる御廟や、山門、唐門、鐘楼等の歴史的建造物が現在まで良好に維持されています。また境内とこれを取り巻く一身田寺内町とが一体的に整備され、ひとつの歴史的な景観をなしています。

今回、御影堂、如来堂は「重要文化財のうち極めて優秀で、かつ、文化史的意義の特に深いもの」という指定基準により国宝指定の答申を受けました。

現在、御影堂・如来堂は昭和36年に、また境内の山門等11棟が平成25年に重要文化財に指定されています。

国宝（建造物）では県内初の指定となります。

2 国宝答申（予定）文化財の概要

○御影堂

【名称】専修寺（せんじゅじ） 御影堂（みえいどう）

附 宮殿（くうでん） 一基、

旧獅子口（きゅうししぐち） 一組

【建立年代】寛文6年（1666）

【構造】桁行9間、梁間9間、入母屋造、本瓦葺

（桁行42.6m、梁間36.6m）

【概要】

宗祖親鸞及び歴代上人を祀る堂です。専修寺の境内では最も古い建造物で、江戸時代の寺院建築では全国でも5本の指に入る大きい建物です。屋根を支える柱を効果的に配置し、大空間を確保すると同時に、多彩な装飾で壮麗な信仰空間をつくりだしています。また、床の高低差や柱によって内部の空間を区切ることで、空間秩序をあらわしており、他の浄土真宗寺院とは異なる

特徴をもっています。

また、親鸞像を安置する宮殿（くうでん）は棟札から元禄15年（1702）に作られたことがわかり、金箔や極彩色の彫刻で飾られた華麗な意匠が特徴です。この宮殿と、建築当初に大棟（おおむね）に据えられていた獅子口（ししぐち）が附（ついたり）として指定されます。

○如来堂

【名称】 専修寺 如来堂（によらいどう）

附 宮殿（くうでん） 一基、

「如来堂御建立録（によらいどうごこんりゅうろく）」一冊

「御本山阿弥陀堂御上棟儀式御飴物（ごほんざんあみだどうごじょうとうぎしきおかざりもの）」一枚

【建立年代】 寛延元年（1748）

【構造】 桁行5間、梁間4間、入母屋造、本瓦葺

（桁行25.7m、梁間26.6m）

【概要】

御影堂の西に位置し、本尊 阿弥陀如来立像（あみだによらいりゅうぞう）を祀る堂です。御影堂と比べると面積は小さいのですが、高さを揃えることで、大きさの違いを感じさせないようにになっています。

外観は、禅宗様（ぜんしゅうよう）の特徴の一つである組物に、彫刻を施し、裳階（もこし）を付けた重厚な屋根に負けない力強い造形となっています。また、室内は精緻な彫刻が施された組物や欄間、金箔で華やかに装飾されており、荘厳な空間をつくりだしています。

本尊阿弥陀如来像を祀る宮殿は、扉の銘より元文6年（1741）に京都で制作されたことがわかり、彫刻や金箔で華麗に装飾されています。

また、如来堂を立てるために、末寺や門信徒が資金を集めた当時の記録である「如来堂御建立録」と上棟儀式時の供物の記録である「御本山阿弥陀堂御上棟儀式御飴物」という2つの古文書が、宮殿とともに附として指定されます。